

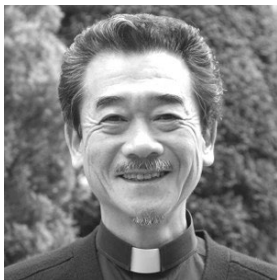
ヨゼフ会便り



発行者 ヨゼフ会 横浜市中区山手町44番地 カトリック山手教会内

第51号 2024年3月30日発行

バンド復活！！



主任司祭 鈴木 真

以前、どこかに書かせて頂きましたが、10年前から教会の仲間たちでロックバンドをやっています。わたしが山手に来てから、

二回ほど山手でも地下ホールで演奏させて頂きました。わたしは教区の青少年活動に長年携わっていることから、数多くの青年たちと出会い、違った世代の中で音楽に係わる青年たちが集まって、固定バンドができました。中でも曲を書くヤツがいて、結構聖歌っぽいものも作っていることから、彼の曲をみんなでアレンジしてやろう…と、活動が始まりました。メンバーは8人で、世代も色々、現在は20代、30代、40代…そしてわたしが60代といった感じでした。教会もそれぞれ、藤が丘、戸塚、菊名、山手、中原、貝塚。構成は、わたしがドラムで、曲を作っているバンドマスターがアコースティックギター、ベース、リードギター、ボーカルは男女1人ずつ、それにヴァイオリンが二本。この、ロックバンドでヴァイオリンというのがちょっとミソです。

始めた当初は、わたしも含めてみんな自分の楽器を演奏するのにいっぱいいっぱい、という感じでした。当時の音源を聞くと、粗削りながらも結構いいな…とも思うのですが、そのうち音のバランスがあまり良くなって、低迷した時期もありました。そのうちみんなが人の音を聞くようになってきて、おお！いい感じじゃん…と思っていたら、コロナに

突入して、活動休止を余儀なくされました。忘れもしない2020年2月。練習でスタジオに入り、先行きが見通せない不安の中、とりあえず月一回はスタジオに入ろう、と言っていたら、次の月からスタジオも閉鎖になってしまいました。

そして演奏できないまま三年…長かった。時々集まっていましたが、その三年の間、二人のメンバーが結婚して、一人は子供が生まれて…など、環境の変化もありました。そして昨年、わたしの出身教会である由比ガ浜教会が献堂110周年を迎え、「バンドやりませんか？」とお声がけ頂き、コロナが5類に移行したこともあって、ようやく復活しました。久しぶりに集まって音を出してみると、意外にも以前のようにうまくいきそうで、ホッとしました。ただこの3年の間に、わたしの体力の減退も著しく…当日の機材の搬入と搬出だけで死にそうになっちゃいました…。なんと、情けない。



2023年 由比ガ浜教会にて

でも久しぶりにバンドが復活して、チームで一つのものを作り上げる喜びを、改めて実感しました。みんながお互いの音を聞き合って自分の音を出し、

一つの曲に魂が入る。これって結構、福音的ですよ
ね。

というわけで……今年はこちら山手教会の聖堂で、
6/22(土)、演奏させていただきます！バンド名は
「The up cedar's (ザ アップシダーズ)」。実はバ
ンドマスターが「上杉」なので、上杉バンドという
安易な名前です(笑)。ユーチューブにも曲を上げて
います。当日は皆さん、ぜひ聞きにいらして下さい！
宜しくお願いします。

信者になって5年が過ぎて思うこと



志村 光祥

この度ヨゼフ会の幹事
の一員に加えていただき
ましたヨハネパウロシム
ラムツヨシです。どうぞよ
ろしくお願ひいたします。

現在奉仕としては日曜日朝7時30分のミサの案内
係と土曜日夕方5時のミサの第三土曜日の第二朗読
を担当しております。また、墓地委員会の委員もや
らせていただいております。

信者になって5年がたちました。あっという間で
したが思い起こすといろいろなことがありました。
聖堂の修繕工事新型コロナウイルス対策など何かと
制約があり、聖堂が工事で使えなくなり教会ホール
でのミサとなりました。慣れない案内係でうろうろ
するばかりでした。一度ブツブツ独り言を言ってい
るちょっと変わった人が入って来てどうしていいも
のかと困りましたが、結局は山手署から警察官がき
て連れていってくれました。開かれた教会としては
その様な人も受け入れるべきだったのでと迷いま
すが、聖堂に移ってからは今のところそのような人
は来ていないようです。

案内係の役割も誰が決めたわけでもなく何となく
決まってきました。私は晴れた日には聖堂入口の階
段下の落ち葉の掃き掃除が習慣となっています。最
近はお手伝いしていただく方が増えて範囲も広がり
駐車場や外の歩道、側溝、公園に行くほうの道路も

やるようにしています。通行人や犬の散歩をしてい
る方に「おはようございます。きれいになりますね。」
など声をかけられると嬉しく気分のいいものです。
まさに平和の挨拶だと感じます。声をかけたりかけ
られたり鈴木神父が常々言われる自分を通して神様
がお働きになっているのだと思います。寒いと早起
きはつらいのですが天気の良い日は続けたいとおも
います。

土曜のミサの朗読はなかなかうまくなりません。
いい時もあるのですが、声量は十分か、滑舌はいい
か、読む速さはどうか毎回悩み反省します。第二朗
読はパウロの手紙なのでパウロが下りてくるまで何
度も音読して練習しています。墓地委員会も十分に
活動できず心苦しく思っています。合葬墓が完成し
て3年たちまして改葬の方も年々増えているよう
です。興味のある方は一度ご覧ください。昨年はコロ
ナが5類に引き上げられたので4年ぶりに有志の
方々が11月の死者の月に墓地清掃をおこないまし
た。また定期清掃もやり、都度修繕もしてとても良
い雰囲気のところとなりました。主の平安という場
所です。私も年金をもらう年になりました。子供た
ちに迷惑をかけないように天に召される時まで元
気に日々過ごしていきたいと思ひます。

写真は昨年12月末に家族で山手墓地に墓参りに
来たとき聖堂のイエス様と馬小屋を見学させていた
だきました。恐縮ですがイエス様の前でイエス様の
ポーズで両手を広げてパチリです。息子たちは小さ
いころからボーイスカウトで子供のミサに来ていま
したが近くでじっくりと見たことがなかったとしば
し見入っておりました。

長年携わってきましたボーイスカウト育成会副会
長を昨年でやめました。何事もあまり長居しないほ
うがよさそうです。リーダーも変わりスカウトも変
りますので新陳代謝です。老いるショックではあり
ますが老害にならないうちに老兵は去りゆくのみで
す。二人の息子たちもボーイスカウトにはお世話に
なりました。子供たちはそれぞれ独立して家から巣
立っていきました。ボーイスカウトには感謝です。



放蕩息子の例え話ではないですがいくつになっても子供はこども心配です。ちなみに私の息子達は放蕩ではありません。念のため私が放蕩でした。

世界の国のリーダー政治家も長居をしすぎるのもいろいろ弊害が出てきて良くないように思います。潔く次にバトンタッチをすればいいのにとおもいます。意地の張り合いになって収拾がつかなくなってしまう第三次世界大戦になりかねません。神に祈るしかないですがこれも神様のご計画なのでしょう。地球規模で人口が減れば消費が減りエネルギーを抑制できるでしょう。日本は今のところ戦争はありませんが毎年災害が起きています。大変なことです。そなえよ常に。

主の平和

ヨハネパウロ志村光祥でした

¶ エンコム横浜



黒部 仁

私は週に何日か横浜教区難民移住移動者委員会 Encom Yokohama に事務局として参加しています。カトリック末吉町教会が

建て直しの際、一部お借りしてホールと事務所を構えました。なかなか教区内においてその存在・役割が認識されていないのが現状です。冬になると船員さん達に帽子やカレンダーなどプレゼントに訪船している横浜教区ステラマリス(旧 AOS)も一部門です。外国籍信徒の司牧や小教区における外国語ミサのサ

ポートなどもその一環です。また在留資格のない方々の生活援助、在留資格はあるが生活困窮者への生活援助、技能実習生たちの不安や研修先での労働問題・ハラスメントの対応など様々です。その中であまり知られていない難民支援について少し書かせていただきます。



難民というと最近ではアフガニスタン・ウクライナ・ガザ地区などが大きく報道され隣国へ歩いて逃げるのが難民だとか言う政治家もいました。日本では考えにくいですが、宗教や人種・政治思想で迫害や命を追われる国も多くあります。命の危険を感じ着の身着のまま母国を捨て日本を頼ってくる人も多くいます。中には VISA が無い為、空港から入管施設に送られ何年も収監されている人々も少なくありません。見知らぬ国、知らない言葉に囲まれどのように感じているか思うと心が痛みます。

先日は夫婦二人で来日し難民申請をしているご夫婦と面談する機会が有りました。政府組織に目をつけられ犯罪に巻き込まれそうになり、本人たちはカトリック信者で犯罪の手伝いは出来ないとしたところ更なる嫌がらせを受け、命の危険もあり耐え切れず生まれたばかりの赤ちゃんを親戚に預け来日していました。難民申請後8か月は日本政府からの金銭的支援もなく働くことも認められず、母国で貯めたお金は来日する際中間業者などに支払い、ほとんど持ち合わせが有りませんでした。言葉も通じない国で難民支援協会の紹介で仮住まいを転々と歩き、カトリック教会を見つけ訪ねて来られました。一度

は長期滞在可能な施設を紹介し、入居出来ましたが肌に合わないのか一週間で施設を出てその後連絡はありません。

そんな中まだ記憶に新しいと思いますが、スリランカ人の収容者ウィシュマーさんが名古屋収容所内で悲しい最期を迎えました。当時入管法の改正(私たちは改悪と認識しております) 法案も廃案になりました。しかし昨年ほとんど同じ内容で再提出され6月の議会で成立・交付されました。本年6月に施行が迫っています。大きく違うのは、従来、難民申請中は強制帰国できない仕組みになっていました。これを一人3回までしか申請を受け入れず、不認可の場合強制帰国させる事が出来るようになっていました。難民申請中に子供を授かり日本で出産、親の母国には一度も行ったことがない子供たちまでもがその対象です。他にも仮放免にあたり保証人という制度があります。従来は特に罰則制度は有りませんでした。今後は管理措置という名目で管理人が被管理者が何かあれば入管に報告せねば過料の制裁を受けることとなります。保証人は申請者側の立場でしたが今後は国側の立場となり管理の対象となってしまいます。そんな中申請者との信頼関係は構築できるかも疑問の一つです。

ただ悪い点ばかりでもなく、日本で生まれた子供たちとその家族に特別在留許可を与えるという事です。現にエンコムで支援を続けていた某国の家族も夫婦で来日在留許可が無いまま4人の子供を出産、長女はすでに高校二年生です。その間両親は非正規滞在という事で子供たちは養護施設に入所。本人た

ちは入管施設に収監の経験もあります。善意あるグループが住居を提供して暮らしていました。公共料金の滞納などで困窮しており水道ガス電気も止められ、昨年10月にその住まいに住むことも出来なくなり、同じ学区のアパートに越しました。子供たちは転校することなく同じ学校に通えている様子です。昨年12月に特別在留許可が両親に出され、子供たちは留学 Visa という形で在留資格を取得でき、これで働ける。と父親が喜んで事務所に来所され「ハローワークで仕事も見つかった。」とそれは嬉しそうでした。奥さんは今までお世話になったお礼にボランティアなどで恩返しをしたいと思います。

今後新法が6月より施行されニュースや報道で目にする機会も増えると思います。「何か誰かが書いてたな。」と関心持っていただければ幸いです。

最後になりますが、コロナ禍で3年間中止していた、国際フェスティバルを9/23(月)不二聖心女子学院をお借りして多言語ミサを中心に各国の料理などで国籍の垣根を超えともに祈る時間と分かち合う事が出来ればと考えます。難民移住移動者献金の日に合わせ日曜に開催していましたが、小教区のミサもあり中々参加できない方も多かった為、主日以外の祝日に開催します。日本人は遠慮してしまう傾向にあります。遠慮なく参加していただき共に祈り・喜びを分かち合えたら楽しいなと準備を進め出しています。またスタッフも募集することになると思います。その節は、ご協力のほど宜しくお願いいたします。



Ⅰ カマクラの社長



時久 毅

何の青雲の志もなく、成り行きで入った住宅建築の世界。気が付けば36年の歳月が流れました。この長い年月の中で様々な人

に出会い、支えられ、ここまでやってこられました。その中でもとりわけ下請けの業者の皆さんは欠かさない存在です。我々住宅メーカーがいくら優れた設計図を描いても、それを実現してくれる業者の皆さんがいなければ仕事にはなりません。建築の下請け業者は零細企業や個人事業主が多く、請け元の要求に応えるべく、並々ならぬ苦勞をしているのが実情です。日々多忙を極め、体調を崩しても自身の健康より仕事を優先させてしまい、中には落命してしまう人もいます。

今回のお話の主人公、カマクラの社長もそんな業者の一人でした。エクステリア(車庫や門扉)を手掛けるカマクラハウジング。その社長の原さん。歳は70代半ばで瘦身禿頭、つり上がった細目でドクロのような顔つき。一見怖そうな風貌とは裏腹に、実に心根の優しい人で、皆から「社長、社長」と慕われていました。夜遅く事務所で残業をしていると、入り口のドアが半分開き、ドクロのような顔を覗かせてニコッと笑い、「みんな～、こんな遅くまで仕事しちやダメだよ～」と言いながら両手一杯に抱えたお菓子を差し入れてくれることがよくありました。

またお客様の急な依頼で、翌朝までにどうしても間に合わせなければならない凶面、見積りがあるときなど藁にもすがる思いで原さんに電話すると「わかった。なんとかする」と頼もしい返事。翌朝FAXのトレイに依頼したものが届いていて、送信時刻を見ると明け方近く。「社長申し訳ない！」心から詫びたものでした。日中は現場を飛び回り、時には一職人として汗を流し、夕方事務所に戻ると山のような事務作業をこなす。そんな無理がたたったせいか、原さんは大腸癌を患ってしまいました。

ある日いつものように仕事の電話をすると事務員から原さんが検査の為一週間程入院すると告げられました。検査入院だからすぐに戻ってくるだろう、と仲間内で話していた矢先、訃報が飛び込んできました。「え！検査入院のはずじゃ・・・」。正に晴天の霹靂。後で聞いた話では、身体に異変を感じ、病院へ行ったときには既に手遅れの状態だったそうです。

今の会社に入って長い間、新築住宅の営業をしていましたが、10年程前から戸建て住宅のリフォームの仕事に転じました。リフォームの仕事は多岐に亘りますが、割合的に多いのが外部塗装です。塗装工事は足場が付きものですが、足場には安全上の理由と粉塵飛散防止の為、ネットが張られています。このネットはひとたび強い風を受けると、足場が建物に当たって傷つけたり、最悪の場合倒壊という重大な事態を招いてしまいます。その為、強風が予測される場合は、ネットを外し、カーテンのように隅に束ねて固定して風が通り抜けるようにしなければなりません。通常はそのような一連の作業は業者の職人さん達がこなしてくれますが、日曜祭日に当たってしまうと職人さんがつかまらないことがあります。その場合は自分でやるより他ありません。

とある11月の下旬、そんな事態が発生しました。季節外れの強風が吹き荒れ、夜半には更に強まるとの予報でした。生憎その日は祭日で、手当たり次第職人さんに連絡を取りますが通じません。「しょうがない、自分でやるか」と腹をくくり、現場に向かいました。いざ作業を始めると、手がかじかんでネットを固定している紐がなかなかほどけません。全体を見渡すと紐は無数に有り、絶望的な気分になりました。それでも仕方なく作業を進めていると、ふと良いアイデアが閃きました。「そうだ！紐を切ってしまえ。紐の金額などたかが知れている。足場屋から文句を言われたら弁償すればいいんだ」早速道具箱からカッターを取り出し、紐を切り始めると瞬く間にネットが外れました。後は足場の隅にネットを束ねて作業終了。その夜は多少強い風が吹いたものの、大事には至らずに済みました。

それから数日経ったある晩、不思議な夢を見ました。たまにみる妙にリアルな夢です。夢の中で私は例の足場でネットの紐と格闘しています。すると誰かが足場に上がってくる気配がします。足音がする方に目を向けると、見覚えのある禿頭、ドクロの顔。そう、カマクラの社長原さんです。「あれ、社長どうしてここへ」。「時久さん、こういうことはさ、僕たち業者に任せて。明日も早いんでしょ、さあ帰った帰った」。ニコッと笑うと作業を開始し、あっという間に終わってしまいました。「社長、助かった。ありがとう！」。普段みている訳の分からない夢は起きた瞬間に忘れてしまうものですが、この時の夢ははっきりと覚えていました。そして「あ、そうか。あれは社長が助けに来てくれたのか」と気付きました。寒くて暗い現場で絶望的な気分が陥っていたところに、たまたま良い考えが浮かんで事なきを得た。その体験が意識の奥底に潜み夢となって現れた。この一連のストーリーは脳科学や心理学を駆使すれば合理的、科学的でかつ何の面白味もない説明が可能だと思います。しかし私は今でも原さんが助けにきてくれたのだと信じています。そう思うことで心が温かく、豊かになる気がします。

仏教では人の心を8つの層に分け、我々が意識できない最も深い層を阿頼耶識あらいやしきと呼んでいます。阿頼耶識は死によって肉体が消滅しても、消え去ることはないそうです。それは果てしなく流れる大河に例えられ、そこには彼我(自分と他人)の区別がなく、お互いが深くつながっています。そう考えれば、現世で身近に居る人達が直接働きかけてくれることと、この世を去った人達が目に見えない形で働きかけてくれることに、さほどの違いがあるとは思えません。日常の生活の中では鬼籍に入った人達を含め、色々な人に助けられ、支えられているのだ、ということを実感し、感謝の気持ちを忘れないようにしたいものです。

侍者会より、ごきげんよう



藤本 哉夢

主のご復活おめでとうございます！初めまして。この度ヨゼフ会便りへ初めて寄稿しますので、まずは私の自己紹介をさせていただきます。

幼児洗礼をカトリック高輪教会(東京教区)で受けまして、その後山手教会へ転籍し山手教会で初聖体を受けました。小学校2年生のとき、当時の担当司祭は岩間神父様であったと記憶をしております。初聖体を受けてすぐに侍者奉仕をはじめました。当時は侍者会が設立されたタイミングで、司牧実習で来られていた宮内神父様(当時神学生)や現在も典礼委員会・侍者会として活躍いただいている古川麻衣さんに色々と教えていただいております。その後侍者を続けておりましたが、引っ越しがあり大阪に4年ほど住んでいた時代もあります。その時は教会の転籍はせず、ときどき大阪カテドラル玉造教会へ行っておりました。大阪に居を構えておったときに大阪大司教区(現在の大阪高松大司教区)の前田万葉司教様が枢機卿になられ、面識こそないですが同じ大学出身の酒井俊弘神父様が司教叙階をされたことがとても記憶に残っております。



2018年12月 玉造教会にて

その後再び引っ越しで関東に戻って参りまして山手教会に復帰し侍者として奉仕する中、2019年頃より侍者会のリーダーを務めております。カトリックの学校で教鞭をとっていた時期もありましたが、

体調を崩したこともあり現在はメンタルヘルス関連の会社で一企業人として仕事をしながら、普段は日曜日昼のミサで侍者奉仕と聖体拝領での奉仕を行っております。

今回はタイトルにもある通り、侍者会について紹介をいたします。侍者会は今から20年ほど前、各ミサで侍者の奉仕があるミサとそうでないミサがあることを防ぐため、また全体でのレベルアップをはかり荘厳ミサをはじめとする大きなミサでの奉仕を円滑に行うことなどを目的に設立されました。形はさまざま変えながら、現在でも記載の目的を達成すべく活動を行っています。

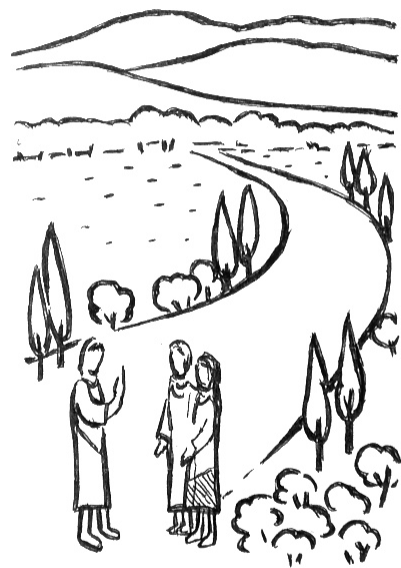
侍者はどうやったらできるの?といった質問をよくいただきますが、侍者になるための必要条件は初聖体を受けていることです。受洗されるタイミングで初聖体を受ける場合もあるかと思いますが、その場合は受洗後すぐに侍者奉仕することができます。堅信を受けていることは必ずしも必要ではありません。そのため教会学校とも連携を取り、初聖体後には侍者会の紹介活動も行っています。必要条件は記載の通りですが、それ以上に【神様の近くで奉仕したいと思う心】そして【皆から見られるお手本となる気持ち】が非常に重要であると考えています。最初から備わっている必要はありません。その意識があるか、身に着けようと思っているかどうか非常に重要です。ミサが始まる前、香部屋ではミサでの役割を確認しながら準備を行っています。例えば朗読の際、侍者が必ず横につきますがどのタイミングで誰が迎えに行くかといったこともその一つです。この動きを決める際も先ほどの意識が非常に重要で、じゃんけんで負けたからといった決め方はしないように指導しどのタイミングで行きたいかを本人の意思に委ねて決めるように伝えています。とは言いつつも、最近の私はもっぱら見守っているだけのことが多いですが、一見すると些細なエピソードの一つではありますが、日々の奉仕を通じて、進んで取り組む心を再認識し強めていってほしいと感じています。誰かがやる、ではなく自分でやる。お手本となるこ

ともその一つです。

少し難しいことも書きましたものの、私自身、長年侍者として奉仕できること、現在は後進の育成に携われていることに大きな喜びを感じていることは紛れもない事実です。山手教会出身司祭の山田神父様や水上神父様の司祭叙階ミサで奉仕できたことは、とても印象深くとても貴重な時間だったと今でも思い出されます。

神様の近くで奉仕したい、もっとミサを近くで味わいたいと思ったのであれば、それは神様が心に語り掛けてくださった言葉ではないかと思います。小学生・中学生を中心に(それ以上でも)ぜひ侍者会の門をたたいてみてください。

カトリック横浜教区報第69号の言葉を紹介して締めくくりたいと思います。【侍者は、人に仕えるために御子をお遣わしになった神に仕える人です。】



ヨゼフ会の昨年度活動について

1) 2023年度の活動

従来からのミサの案内係、先唱、朗読等の教会奉仕活動、ヨゼフ会便りの発行、帰天者のための追悼ミサ、木曜パトロール支援等に加え新型コロナウイルス感染症の鎮静化に伴い活動を開始し、3月の黙想会、5月から例会を再開、6月のスモールクワイアコンサート、7月には聖堂修繕工事完成記念講演会、ミニ福祉イベント等の活動を行いました。

2) 2023年度会計報告と2024年度予算

企画中の「ヨゼフ会総会」にて報告の予定です。今年から会費納入を再開いたしましたので、ご協力よろしくお願いいたします。

ヨゼフ会の今年度役員について

- ・会 長：岡崎芳浩
- ・副会長：久保田智洋、時久毅
- ・会 計：世界孝二
- ・幹 事：石澤正夫、稲見友一、小倉謙、
佐藤康夫、志村光祥、末澤二郎、
田中広一、坪井暢、古谷信彦、
二宮正樹、宮裕一、柳川晋一(五十音順)
- ・監 事：青木淳、佐々木和男

ヨゼフ会活動報告(1月～3月)

- ・2月10日(土)：聖堂、教会ホールの大掃除
- ・3月30日(土)：ヨゼフ会便り第51号発行

ヨゼフ会活動予定(4月～6月)

- ・6月29日(土)：ヨゼフ会便り第52号発行予定

会員消息

・次の方が帰天されました。永遠の安息をお祈りいたします。

帰天日	洗礼名	氏 名	享年
2024/02/23	ヨゼフ	天野元雄様	92歳

ヨゼフ会便り第51号発行にあたり感謝と御礼

ヨゼフ会便り第51号を発行する運びとなりました。寄稿者、読者の皆さまの、ご協力ご支援の賜物と感謝し御礼申し上げます。今後もより良い誌面作りに努力してまいりますのでよろしく願いいたします。

・ヨゼフ会便り編集部：

小倉謙、久保田智洋、佐藤康夫、坪井暢 (五十音順)

編集後記

「なみだ」春分の日をすぎ、夜より昼の時間が少しずつ長くなってきている。今年の3月はなぜか寒い。大岡川をはじめとした桜の開花も遅れている。

そんな3月10日山手教会昼ミサ終了後仙台に向け旅立った。翌11日元寺小路教会にて13年経つ東日本大震災の追悼ミサに与るためである。

これまで塩竈、松島海岸、石巻、女川を訪れている。特に石巻日和山公園は震災10年の時だったのでコロナ禍の中14時46分祈る人であふれていた。

当時メディアも新聞中央紙、河北新報ほか地方紙で連日特集が組まれNHKのドラマは一色伸幸脚本「ペペロンチーノ」等が放送され祈りを捧げた。

ただ今年は13年という微妙な年月が影響しているのか追悼ミサに与る人が減少している気がした。

まだ原発処理水の問題そして津波で亡くなり流され数えきれない多くの遺族の「なみだ」が残されているのは事実だ。今年は元日能登半島地震が発生して少々複雑な思いの中、元寺小路教会を後にした。パイプオルガンの美しい音色だけが残っている。関東在住だが決して風化させたくないと心に誓う。

若い時は嬉しい時も「なみだ」したように思う。漢字は「涙」ではなく「泪」の方が昔荒川区、品川区の刑場の近くにあった別れの橋「泪橋」、豊臣秀吉に切腹を命ぜられた千利休の「泪の茶杓」という「泪」の意味合いのいくつかを超えて私は好んでいる。

今年の復活徹夜祭にて受洗される皆さん、心よりおめでとうございます。遅れていた桜の開花の直後です。これから共同体の一員として嬉しい「なみだ」をながせるように。感謝と祈りのうちに。(坪井暢)